

男性高齢者の外来がん化学療法で使用される経口抗がん剤の処方動向

三宅 祥太¹⁾、塩野 美友紀²⁾、黒川 由紀子³⁾、永野 悠馬⁴⁾、前田 守⁴⁾、
長谷川 佳孝⁴⁾、月岡 良太⁴⁾、森澤 あずさ⁴⁾、大石 美也⁴⁾

1)(株)アインファーマシーズ アイン薬局 西新宿店

2)(有)エスポワール 中込のぞみ薬局

3)(株)アインファーマシーズ

4)(株)アインホールディングス

【目的】当社グループが実施した過去の研究において、外来がん化学療法の対象患者数は、男性では75歳以上80歳未満を頂点とした一峰性、女性では65歳以上70歳未満と50歳以上55歳未満に山を持つ二峰性の分布であり、女性患者における経口抗がん剤の処方動向は、新規抗がん剤の上市や既存抗がん剤の適応拡大により大きく変動することを報告した(本学会第30回年会)。本研究では、男性でがん罹患率が高くなる65歳以上の外来がん化学療法患者に着目し、その処方動向から薬局薬剤師の高度薬学管理機能発揮に向けた課題について検討した。

【方法】2017年4月から2020年10月に当社グループが運営する保険薬局583店舗が応需した65歳以上の男性患者の処方箋11,111,006枚を対象に、YJコード上で腫瘍用剤に分類される経口抗がん剤の処方動向を調査した。結果は、75歳未満を前期高齢群、75歳以上を後期高齢群として群分けした(アイングループ医療研究倫理審査委員会承認番号:AHD-0087)。

【結果】応需処方箋枚数における抗がん剤を含む処方箋枚数の割合(以下、抗がん剤応需率とする)は、2017年4月は2.17%、2020年10月は2.27%であった。作用機序別分類ごとの抗がん剤を含む処方箋が全応需処方箋に占める割合は、ホルモン療法剤について、前期高齢群では42.8%、後期高齢群では72.1%、代謝拮抗薬についてそれぞれ42.0%、10.4%、分子標的薬についてそれぞれ13.2%、7.2%であった。

【考察】後期高齢群は前期高齢群よりもホルモン療法薬の使用割合が約30%も高く、加齢による前立腺がん発症数の増加が影響したことが示唆された。薬局薬剤師は用法用量、副作用等の薬剤特性はもちろんだが、今回示した「年齢・性別による薬剤使用頻度の変化」やその変化の原因となる「薬剤の適応がん種」「がん好発年齢」等を理解することについても、高度薬学管理機能を発揮して外来がん化学療法に貢献するために必要であると考えられる。

(第31回医療薬学会年会(2021年10月, Web)にて発表, 一部要約)